

鸚鵡石 (序に代ふる對話)

森 鷗外

人物

主人。著述家。五十歳許の男子。銘撰の不斷着。兵兒帶。

客。出板人。三十歳許の男子。洋服。金縁目金。

場所

著述家の部屋。八疊。床の間に掛物を掛けず、和洋の書を亂雜に積上げあり。机一つの外に家財なし。その前後左右には書籍取り散らしあり。大なる紙屑籠は机の附屬品なるかと思ゆばかりに据えあり。○主人机の前に破れたる座蒲團を敷き胡坐をかきゐる。客なる出板人の前には灰皿にマッチを出しあり。

客。先刻は電話で直すくに伺ふやうにといふ事でしたから参つたのですが。

主人。君の來るのを待つてゐた。鸚鵡石の一件でね。

客。もう大分運びましたでせう。表紙や扉をどうなさるお積ですか。そろ／＼誂へて置きたいのですが。

主人。ところが表紙どころでは無いよ。中實なかみがだめだ。

客。どうしたのですか。

主人。ゆうべ電話で印刷所へことわつて遣つた。僕は鸚鵡石は出版しない事にした。

客。はゝゝゝ。笑談云つちやあ行きません。もう二百ペエジ位組み上げてある筈ぢやありませんか。一體どうしたと云ふのです。

主人。どうもしない。僕は初からあんな物は出版したくはなかつたのだ。鸚鵡石の内容は何だ。弟の生きてゐる間、一しよう懸命で遣つてゐた雑誌に應援しなければならぬといふ義理で、そこいらに來てゐる西洋の新しい脚本を、口から出まかせに譯して、秋汀君に筆記をして貰つたのではないか。雑誌の賑やかしになつてしまへば、あの翻譯の mission は果されたといふものだ。何も本にして二度の勤をさせるには及ばないではないか。勿論口から出まかせとはいふが、僕は原作者に對して申わけのないやうな亂暴はしない。口譯をする瞬間には、僕はそれに全力を傾注してゐる。僕

は何をするにでもさうなのだ。それだから、世間の人が冷かすやうに、僕が口譯物を公にしてゐるのが、情ないといふのは分らない。僕は一箇月に四時間位も口譯をするだらう。さうして見ると、口譯といふものは僕の生活の百八十分の一に當つてゐて、僕の精力の正味百八十分の一を費した貨物しろものなのだ。これが情なければ、僕の生活の他の百八十分の百七十九も情ないのだ。僕の生きてゐるのも情ないのだ。そりやあ實際僕の生きてゐるのなんぞは情ないかも知れない。時々はそんなやうな心持のする事もある。併し僕が口譯をするといふのは、よその著述家と違つて、自分で筆を持つて譯する丈の時間が得られないのだから爲方しかたが無い。譬へて見れば、戀なんぞのやうな時間を費す生活の出来ない情天地の貧乏人は、電車に乗つてゐる瞬間に、向ひに据わつてゐる女の膝の上に置いてある、細い白い手を見て、その女の生立おひたち、性質、境遇、何から何まで打明けて聞せて貰つたやうな心持をすることもある。その女は次の停留場で降りてしまつても、その男の記憶には、女の手の皮下靜脈の網がいつても筆を取つて畫かれるやうに刻み附けられてゐるのである。世には三年連れ添うた女房が死んで、一年も立たない内に、顔の鬢ほくろが右の目の下にあつたか、左の目の下にあつたか忘れてしまふやうな人もあるのだから、そんな人の三年の生活よりは、電車で女の手を見た男の二三分間の生活の方がintensivであると云つても好からう。僕は

此意味に於いては、僕の口譯を尊重する。それと同時に、僕は彼の電車に乗つてゐた男が、女の跡を附けて行つて、戸籍を調べて妻に持たうとはしないと同じわけで、僕の口譯物を立派な本にしようとは思はないのだ。それなのに君が立つて勧めるから、兎に角一冊に纏めても好いと受け合つた。そこで雑誌の切抜が樂文館の印刷所の手に渡つて、校正刷が廻つて来るやうになつた。僕は樂文館といふ内のお世話になるのは、今度が始だが、僕にはとても樂文館の遣方やりかたには服従することが出来ない。僕は僕の書いたものを樂文館に印刷して貰ふことは斷然止やめにした。けふ君に来て貰つたのはその跡始末を附けて貰ふ爲めなのだ。

客。なる程。何にしろさういふ故障が出来ては、出版業をするものの身に取つては非道く迷惑なのですが、一體その樂文館の遣方といふのはどういふ遣方なのですか。

主人。それは是非君に話さなけりやあならないのだ。面倒な事で、甚だお氣の毒だが聞いてくれ給へ。僕と樂文館との衝突はかうだ。雑誌に出た原稿は、秋汀君が僕の饒舌しゃべるのを書いて歸つて、好い加減に手を入れて、すぐに活板に廻したものだ。そこで僕は雑誌の初校を一遍見る。その時に僕は只人に讀めて分れば好いといふ標準で直すのだ。假名も眞名まなも僕の平生の使方つかひかたとは大いに違つてゐる。今それを本ほんにするとなると、其儘にして置くのは心持が悪い。そこで僕は雑誌を切り抜いて、それ

に一々朱で手を入れて、随分赤くなつた奴を樂文館に廻したのだ。それなのに初校の來たのを見ると、一部分は朱で直した方に據つて植字がしてあるが、一部分は元の雜誌の活字の方に據つて、黒の方に據つて植字がしてあるのだ。僕は黒に據つたのは見違だらうと思つて、又直して遣つて再校を取つて見た。すると矢張元の黒の儘にしてあつて、お負に黒の方が好いのだといふ朱書が附いてゐるのだ。其時僕は始めて印刷所が最初から僕の手入に反對してゐたといふ事が分つた。皆では無い。僕の手入の一部分を印刷所が首肯しないのだ。僕は實に驚いた。僕はこれ迄随分方々で印刷をして貰つたが、まだかういふ遣方に出合つたことは無いよ。

客。へえ。妙な事が起つたものですね。さうして見ると秋汀君と樂文館とが同じ文字の使ひやうをしてゐて、先生丈が違ふといふ事になるやうですが、さうなのですか。主人。まあさうなのだ。

客。一體どんな字が、さういふ風に違つてゐるのですか。

主人。（校正刷を机の側に積んである書籍の間より出す。）これを見てくれ給へ。一番澤山ある此の「申す」といふ字なんぞを見給へ。これが雜誌には皆「まをす」とルビを振つてあるのを、僕が「まうす」と直して遣つたのだ。それを初校に皆「まをす」にしてゐる。又直して遣つても、再校にも直つてゐないで、この通とほり「まうすは聊へん

なる様存候」と冷かして書いてあるのだ。

客。はゝゝゝ。成程これは妙ですなあ。併し先生が「まうす」にお直しなすつたのは、どういふわけですか。

主人。どういふわけも何もない。僕だつて「まをす」が誤でない事は知つてゐる。知つてゐるどころではない。明治になつてから「まをす」を不斷使ふやうに復活させたのは、多分僕だらうと思ふ位だ。國民新聞なんぞへ、和文らしい文章でいろんなものを書いた頃は、友達が「まをす」は可笑しいと云つて冷かしたものだ。併し談話體のものに「まをす」と書かれると、どうも心持が悪い。祝詞のりとを讀むときは、今でも「まをす」とはつきり讀むのだ。僕はあれを思ひ出す。談話には誰だつてあんな事を言ふものはない。「もおす」と發音するではないか。音便で「まうす」と書くのが當前だ。他の例を考へて見給へ。箒は「ははぎ」だ。併し談話體には「はうき」と書いてもらひたいのだ。「ほうかむり」(頬冠)を「ほほかぶり」と書かれては溜らない。果して樂文館が一切の音便を排斥するのなら、何故なぜ「いひて聞せて」と直さなければならぬ筈ではないか。白せりふを其儘植字するのだ。「いひて聞せて」と直さなければならぬ筈ではないか。

客。成程。さう云はれればそんなものですが、「まをす」と書いてあつたつて、讀めな
いことはありませんなあ。

主人。勿論さ。讀めない事はないから、雑誌の時は僕も直さずに置いたのだ。併し讀めない事はないから好いなんと云ふのは、藝術的良心の弛廢だからねえ。

客。いやはや。大變なわけですなあ。(問。)そして眞名まなの違ふといふのはどんなのですか。

主人。嘘うそ字は雑誌の時に大抵直してあるから、これも讀めないことはないといふ程度の間違なのだ。「身に染しむ」といふ時に、「沁」の字をどこかの漢學の素養のある人が使つたのを見て、今では誰も彼も「泌」の字を使ふ。お医者さんが「分泌」などと云ふ時使ふ字が、飛んだ處に濫用せられてゐるのだ。こんなのは、僕は雑誌でも容赦はしない。其外「中有に迷ふ」といふのを「宙宇に迷ふ」なんと書くのが普通だ。佛説の三有なんぞを知つてゐるものは少いのだから爲方しかたが無い。こんなのも雑誌の時から無いやうにしてある。(校正刷を指さす。)一寸これを見給へ。これは博奕の「さい」なのだ。雑誌にはウ冠の「賽」といふ字が書いてあつた。それを僕は采色の「采」に直して遣つた。秋汀君の書いた方が、無論世間普通の字だ。誤りではないかも知れない。併し僕は采色の「采」の字の方の由來を知つてゐて、ウ冠の「賽」の字の方は、何故博奕なげの「さい」に使はれることになつたのか知らない。由來を知つてゐる字の方が心持が好いから直して遣つたのだ。これも朱書が附いてゐる。「采は何かの間違と

存候」といふのだ。これなんぞは最も驚くよ。采色の「采」といふ字が何も僻字といふわけではない。言海にだつてウ冠の「賽」と並べて出してあるのだ。僕は漢字に對する専門の智識は有してゐないのに、此頃は忙しくてなかく文字なんぞを調べてゐる暇はない。それだから人の書いた字を直さうとは思はない。樂文館は僕を書く字を直さうとするのだから言海位は開けて見たつて好いではないか。(又校正刷を指さす。)それからこれを見てくれ給へ。雜誌には「わけ」といふ字が皆翻譯の「譯」といふ字になつてゐた。これは世間普通には相違ない。併し僕には翻譯の「譯」の字に、何故「わけ」といふ義があるか分らない。そこでこんな字はなる丈假名で書きたいのだ。併し假名にするのが煩はしい處は、爲方しかたがないから要訣の「訣」の字に直して置いた。誰の説だつたか覺えてはゐないが「わけ」といふ詞は、もと眞名で「訣」と書いたものらしい。それを傳譯の「譯」の字の省文で、言扁ごんぺんに「尺」といふ字を書く「譯」の字と見違へて、それを又正字の「譯」にしたのだらうと云つた人が有る。何にしてる説文に訣は法なりと云つてある「訣」の字には、多少「わけ」といふ詞に當つた處がある。これに反して「譯」といふ字がどうして「わけ」といふ詞の眞名になるのだか、僕には少しも分らない。僕は分らない字は使ひたくないのだ。それを樂文館ではどうしても翻譯の「譯」の字が本當だから、それを使はなければ承知しないといふ

ので、此通に朱書をしてよこすのだ。僕が假名にして置いた處まで、此通に「譯」の字に直してよこすのだ。まあ、ここいらが最も樂文館のお氣に入らない處なのだよ。客。なる程。承ればそんな理窟もあるのでせう。併し先生のやうなねぢくれた考が、樂文館に分らないのは無理はありませんねえ。

主人。それは無理だとは僕も思はないのさ。併し僕は活板屋に對しては、僕の書いたものを分らして貰はうとは思はないのだ。活板屋は僕の書くとほりに植字をしてくれれば好いのだ。譬へて見れば、畫家や彫刻家に物を頼むのなら、先方に製作の自由を與へねばならない。それでさへ Rodin の拵へた Balzac のやうに、注文した方で嫌だと云へばそれ迄だ。職人に物を頼むのに、注文どほりに遣らなけりやあ、其品物を引き取らないと云つても差支あるまい。もう少し進んで考へて見れば、活板屋といふものは著述家の書いて遣るとほりに植字をしなけりやならないのではあるまいか。それが活板屋の義務ではあるまいか。

客。（微笑して頭を傾く。）先生のやうに考へると、活板屋は著述家に服従せねばならないやうに聞えるのです。活板屋は著述家の奴隸でなければならぬやうに聞えるのです。甚だ失禮ですが、其邊はどうでせうか。餘りお話が抽象的になりますから、具體的に樂文館の事を言つて見ませう。樂文館は活板業はしてゐますが、同時に書

肆ですよ。今日事實の上では、書肆が著述家の奴隷でせうか、著述家が書肆の奴隷でせうか。(客の顔は Irony の色を帯びてゐる。)

主人。はゝゝゝ。君はなかなか辯論家だなあ。僕のさつきものやうに云つたのは著述家としての立場から極言したのさ。僕だつて世間に對して丸で盲めくらではないよ。世間はさう窮屈なものではないからなあ。勿論樂文館はえらいよ。併し僕が若し書肆になつたり、活板屋になつたりしたら、もつとえらいかも知れない、活板屋の Skavenaufstand を遣るかも知れない。資本でもありやあ實際遣つて見たいなあ。僕は天國の鍵を握つてゐる聖 Petrus のやうな活板屋になる。嫌な著述家の書くものは一切印刷して遣らないのだ。著述家がいくらあせつても、僕の手を経ずに世間に出ることは出来まい。戀おしは瘡かさでも目で出来よう。盲めくらでも觸覺で出来よう。Publication は僕の手を経ずには出来まいといふ風に息張つて遣るよ。

客。實際さういふ心持は、活板業ばかりしてゐる處は違ふが、書肆には慥にありますよ。(間。)さてわたくしの方の實際問題ですが、此の一件の落着はどう附けて下さるのですか。わたくしの方から印刷所へ掛け合つて、これからは誤植は十分直すといふことにさせれば好いでせう。

主人。いや、僕はもう御免だよ。君はまだ誤植だなんと云ふが、それでは君には僕の

説明が好く分つてゐないといふものだ。誤植といふものは過誤なのだ。誤植の事は僕は言つてはゐない。(校正刷を指さす。)これを見給へ。ここに「ぢつとしてゐらつしやいよ」とわ行のゐが植わつてゐる。こんなのは僕は雑誌の時容赦なく直したから、初からあ行のいになつてゐる。それを印刷所でも大抵あ行のいに植ゑてゐるが、ふいとここ丈間違つたのだ。こんなのは誤植だ。それだからこつちの再校の方を見給へ。先方でも直してゐる。

客。(校正刷を覗き込む。)なる程。皆いろはのいになつてゐますな。何故いらつしやいといふ時、わるうゑをのゐでは行けないのですか。

主人。知れ切つた話ぢやあないか。いらつしやいといふのは「入らせられい」から轉じたのだ。眞名に書けば「入」の字だ。「居」の字の筈がない。

客。それでも誰の小説を見ても、皆わるうゑをのゐを書くか、「居」の字を書かしてゐるぢやありませんか。

主人。それはさうなつてゐるよ。「おいでなさい」も同じ事だ。「御出なされい」だから、眞名に書けば「出」の字で「居」の字ではない。それを大抵皆わ行のゐや「居」の字を書いてゐるのだ。

客。何故さういふ風になつたのでせう。

主人。それは知れてゐるさ。入らつしやいもお出なさいも居ろといふ事だと思つて「居」の字にしたのだ。言語の上の猿智恵なのだ。言語の感情といふものを失つてゐるのだ。

客。いつからさうなつたのでせう。

主人。たつた此間からだよ。僕が始て氣の附いたのは硯友社の人の小説であつた。それから一人殖え二人殖えして、「うゐらつしやい」、「おうゐでなさい」流が天下を取つたのだ。

客。はゝゝゝ。先生は随分馬鹿氣た事を氣にしてゐるのですねえ。

主人。(微笑。)失敬千萬な。何の馬鹿氣た事があるものか。眞面目に文藝を遣つてゐる以上は、言語はいたはつて使はなけりやならない。僕なんぞは人の著述を開けて見て、「うゐらつしやい」のやうな猿智恵の化身がうようよしてゐるのを見ると、體がむづ痒くなるのだ。(間。)そこで君の云つた誤植だが、鸚鵡石には入らつしやいもお出なさいも、あ行の「い」になつてゐるのを印刷所では別に氣にもしないで植字をしてゐて、ふいと一箇所位わ行の「ゐ」を植ゑたのだ。かういふのは誤植だ。それとは違つて、僕が原稿の時から直して遣つてゐるものを、故意に其通にしないで、お負に朱書で反對の意志を表白して來るのは誤植といふものではない。變植とでもいふの

だらう。僕は忙しい體で活板屋と筆戦してはゐられないから、變植に對して何の手段を取ることも出来ないのだ。一體こんな事を遣るのは古今未曾有の遣方なのだ。僕はさういふ遣方をする印刷所には印刷をさせたくないのだ。

客。 どうも困りますねえ。

主人。 それは君の方では少しは困るだらう。僕だつて君の方で多少迷惑するといふことは知つてゐる。併し僕もいやいやながら鸚鵡石を一旦本にするといふことを承知して、忙しい中で随分手数を掛けたのをむだにするのだ。君も我慢して止めてくれ給へ。(問。) 事によれば樂文館は損害要償の訴でも起すかも知れない。起すなら起させるが好いさ。活板屋が故意に原稿と違つたものを植字をして注文したものに押し附けるといふやうな遣方が、正當な遣方だかどうかといふ事を、一度世間の問題にして見るのも、後の爲めに好からうよ。(問。*) 客は迷惑らしい顔をして黙つてゐる。) 同時に君は僕に對して損害要償の訴を起すなんぞも面白からう。さうすれば、僕は法廷で、書肆や活板屋の不都合を大いに鳴らして遣るのだ。はゝゝゝ。

客。 先生。それは悪い笑談といふものです。(問。) そんな馬鹿な事を言はないで、何か始末の附けやうがありさうなものですなえ。

主人。(Ironyの調子。) さうさなあ。君が立つて困るといふなら、僕に考がないことも

ないよ。

客。(膝をすゝむ。) どうするのです。

主人。先づかうだ。君は樂文館へ往つてかう云ふのだ。さて此度は意外な事で、御迷惑を掛けて相濟まない。併しわたくしも鸚鵡石を出板することを受け合つたときには、その中に博奕の「さい」を采色の「采」に書いたり、「わけ」といふ字に「訣」の字が當てゝあつたりするやうな、へんてこな書物だといふことは夢にも知らなかつたのだ。そんなへんてこな書物を出板しようと思つたのはわたくしの災難だ。そこで著者の方へも、十分掛け合つて、出来る事なら、ウ冠の「賽」の字と翻譯の「諍」の字とにして貰ひたいと云つて見ましたが、著者が分らず屋で、どうしても納得しない。わたくしもこれでてこずつたから、二度とふたたびあんな男の書いた物を出板しようとは思はない。馬鹿に附ける藥はない。どうぞあなたの方でも我慢して、此度は著者のいふ通に、間違つた字でも構はないから、植ゑて遣つて下さいとかう云ふのだ。はゝゝゝ。

客。はゝゝゝ。好うございます。今から往つて、何とか云つて纏めて來ませう。左様なら。